YAGI ART MANAGEMENT, INC.
ARTCOURT Gallery

◎ACGプレスリリース ―展覧会開催のご案内―

野村仁「コスミック・センシビリティー ―太陽・酸素―」

Hitoshi Nomura *Cosmic Sensibility ―The Sun, Oxygen―*

《軟着陸する隕石 '96》 1991-1996｜隕石、ソーラーパネル、ミクストメディア｜180x605x250 cm ｜個展「野村仁-移行／反照-」(豊田市美術館、2001) 撮影：中野正貴

《ストロマトロジー：地球自転の永年減速》 1992｜写真｜80 x 100 cm

現代美術家・野村仁の個展を開催します。昨年に展示した《軟着陸する隕石'97》と対となる、YS-11の尾翼に載せて隕石を迎えるもう一つの大型作品《軟着陸する隕石'96》(1991-1996)を中心に、本展では太陽と酸素をテーマとする写真作品や、星の光を音で聴くスコア作品とともに、野村が探求した宇宙と地球上の生命とのつながりを見つめます。

物体に"時の経過"を見る独自の視点をもち、野村は1970年より写真を主な制作手法とする彫刻表現の世界を拓きました。そして、カメラのレンズを地上から天体の運行に移行させて以降、宇宙の諸現象や自然の働きをコンセプチュアルに観察し、ユニークな創造性と多様なメディアで表現しながら、人々と共に感受できる場を創出します。

―「ここで試みようとしているのは、宇宙・天体の運動と地上の生命・文化とが織り成す照応関係の不思議を感じることである。」
(野村仁による《軟着陸する隕石》のためのステイトメントより)

宇宙を旅して地球にたどり着き生命の素をもたらしたとされる隕石、太古の海で最初に酸素を生み出した生物と時を刻み続けるストロマトライト、そして絶え間なく生命に光とエネルギーを注ぎ続ける太陽。今を生きる私たちの身体も形づくる重要なファクターとして、野村はこれらをアクティブに作品に取り入れ、宇宙と地球上の生命とのつながりを提示しました。

また、天体にレンズを向ける転機となったスコアシリーズは、宇宙と人を結ぶ野村のライフワークとして知られています。本展で紹介する《'pleiades' score》は、《'moon' score》と同様にあらかじめ五線譜を写し込んだフィルムに多重露光して制作され、夜空に青く光るプレアデス星団を捉えた「星の譜」です。10月3日の夜には、野村が撮影した写真から採譜や作曲・演奏を手がけ、共同制作に長年携わる吹田哲二郎氏をゲストに迎え、2023年までに制作されたスコアシリーズの展開やエピソードをお話しいただきます。

【展覧会概要】

展覧会タイトル： 野村仁「コスミック・センシビリティー―太陽・酸素―」
Hitoshi Nomura *Cosmic Sensibility -The Sun and Oxygen-*

会　期： 2025年 9月30日 [火] ― 11月29日 [土] ＊日・月・祝 休廊

会　場： アートコートギャラリー (大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F)

開廊時間： 11:00―18:00 [土曜日―17:00]

◎関連イベント　10月3日 [金] 18:00―19:30
野村仁作品を語る「scoreシリーズの全容 」
ゲスト： 吹田哲二郎(サウンドアーティスト)

主催：アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント)
協賛：三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社
協力：有限会社野村研究室

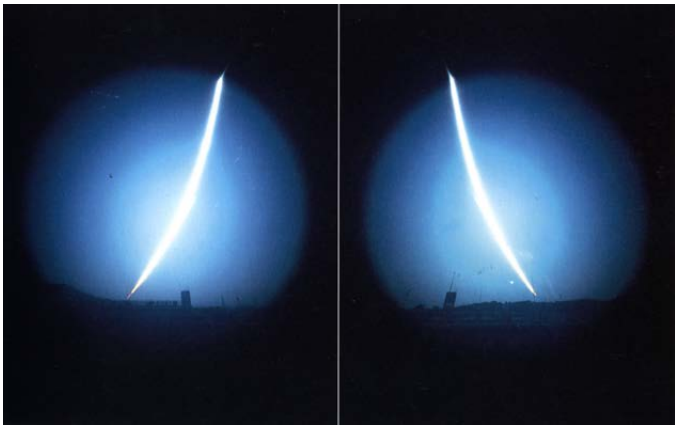
【主な出品作品】

- 《太陽：5月》(1985-1992)
- 《酸素：35億年の営み》
  《ストロマトロジー：地球自転の永年減速》
  《ストロマトライト：1年はかつて435日だった》
  《ストロマトライトの海》(いずれも1992)
- 《軟着陸する隕石 '96》(1991-1996)
- 《'pleiades' score : 励起する真空》(1980-1981)
- 《草叢にBlack Holeが.....》(2017/2018)

など、計10点を予定。

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [大場]　　※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問合せ下さい。
〒530-0042 大阪市北区天満橋 1-8-5 OAPアートコート1F　TEL:06-6354-5444　FAX:06-6354-5449　E-mail:info@artcourtgallery.com　www.artcourtgallery.com

◎ Artist Statement



《太陽：5月》 1991-1996｜写真 2点組｜各 92.5 x 73 cm

《ストロマトライトの海》より
1992｜写真 6点組｜各40 x 60 cm

自然は時間と共に真の姿をあらわすか

野村仁

はるかな宇宙を旅してきた隕石が、今ここに在ります。

気の遠くなるような時の経過を想像しながら隕石を見つめ、そっと触れていると、名状し難い不思議な気分に包まれるのです。また、ソーラーカーに乗って風を切っているときにも同様のことを感じます。思い返してみると、宇宙がこのように身近になるときが幾度となくありました。例えば、自然の事象にレンズを向け、長時間露光や二重撮影の反復をしているときにもしばしば生じ、宇宙は至近距離にあるのだと気づかせてくれます。

宇宙が、かくも身近であるという意識は、撮影を継続しているうちに、いつしか全身に深く浸透し、確実に定着されたように思います。

1967年にダンボール箱が自然の力によって変形したのを目のあたりにして、私は、意志と関わりのない形態があると気づき、ひたすら見つめるうちに深いなにものかが立ち現われるのだと信じるようになりました。そして、重力によって崩壊する自作品《Tardiology》を見つめながら、人為的な造形ではなく、自然の姿を注意深く観察することによってみえてくるものがあると実感したのです。

このことを契機として、経過する時間に注目し、「時間と空間の性質を同等に際立たせた作品を…」と思い至ったのです。それ以来、伝達の手段としてカメラを使用し、写真を作品の基本形態としました。このような作業を通じて、私が思考しているのは、現象の背後にあって現象を生み出している「モト」を照射できないかということです。

我々はどのような「場」にいて、自然の働きはどのように現われるのでしょうか。

1992年末、念願であったオーストラリア西海岸のハメリンプールを訪ねました。そこは海とストロマトライト（註）の他にはなにもない圧倒的な世界。この偉大な太古の光景を眼前にして、生命と物質を貫く何か大切なものがあるにちがいないと強く思うようになりました。

ひるがえって、大地に深く関わりながら推進してきた思考はどこまで有効なのかと思います。我々は緑の大地から離れたとき、如何に思考するのでしょうか。

数十年後、我々が、宇宙空間に浮かんで生活することになり、宇宙の人工的な空間が日常となるなら、精神と身体に与えるインパクトは計り知れません。「畏敬」等について再考することにもなるでしょう。そうして、人の根本が異なってくると思いますが、そのような時においても、アートは限定されたものではなく、拡がりがあり、人の生存について、充分に語り知らせることができると考えます。

幾重にも拡がった時間と空間が意識を生み、この意識が時間と空間に意味を見出していくのですから。

（註）原始地球の大気に酸素は存在せず、30億年前、シアノバクテリアという微生物が最初の酸素をもたらしたとされている。このバクテリアは、夜間に粘液を分泌して石灰質の被膜をつくり、ストロマトライトと呼ばれる石を成長させる。日毎の成長が縞模様を作るので珊瑚等と同様に、その化石を読むと、８億５千万年前、地球の１年は435日であったとわかる。「地球自転の永年減速」が微生物の営みのうちに刻印されているわけで、まさに「時間の塊」と言える。日々の営みのうちに天体を記述したいと思っている私にとっては重要な対象である。

【出典：展覧会図録『野村仁 変化する相―時・場・身』 2009、国立新美術館、p.14 】

◎ Artist CV

野村仁　Hitoshi Nomura

《軟着陸する隕石 '97》 1991-1997
個展「野村仁：コスミック・センシビリティ」
アートコートギャラリー, 2024
撮影：福永一夫

1945　兵庫県生まれ
1967　京都市立美術大学卒業
1969　京都市立美術大学専攻科修了
2023　10月3日 永眠　享年78

【主な個展】
1970 「昇華する沃素と時刻表」ギャラリー16、京都
1987 「近作展2・野村仁 Spin & Gravity」国立国際美術館、吹田
1989 「Cosmo Chronography」INAX ギャラリー、東京
1993 「CRYO PHENOMENA」アートギャラリー・アルティアム、福岡
1995 「CHANGE over TIME」スパイラルガーデン、東京
「CHRONOSCORE」東京都写真美術館、東京
1996 「CHRONON & PROTOMORPH」中京大学 C・スクエア、名古屋ー
「Cosmic Sensibility が作用して・・・」ギャラリーKURANUKI、大阪
「Soft Landing Meteor & DNA 」ギャラリーGAN、東京
1998 「One with the Cosmos」ギャラリーKURANUKI、大阪
1999 「Mission to America & Jurassic Giant Tree in Tokyo」ギャラリーGAN、東京
2000 「野村仁－生命の起源: 宇宙・太陽・DNA－」水戸芸術館現代美術センター、水戸
2001 「野村仁－移行／反照－」豊田市美術館、豊田
2004 「新作展－chroma & chromatic－」アートコートギャラリー、大阪
2006 「Hitoshi Nomura－An Introduction, Photo works 1975-92－」MaCaffrey Fine Art、ニューヨーク
「野村仁－Cosmo Arbor－」アートコートギャラリー、大阪
2007 「Hitoshi Nomura: Chrono & Chroma」アートコートギャラリー、大阪
2008 「Hitoshi Nomura: Gravitational Shape & Flavor－The Sun, Meteorites and The Body－」アートコートギャラリー、大阪
2009 「野村仁：変化する相－時・場・身体」国立新美術館、東京
「野村仁退任記念展：View From Space, From Here On...」アートコートギャラリー、大阪
2010 「Hitoshi Nomura：Marking Time」MaCaffrey Fine Art、ニューヨーク
2013 「野村仁：身体／知覚 又は 私を「私」とおもう私」アートコートギャラリー、大阪
2015 「Hitoshi Nomura: Contingency and Necessity [野村 仁： 偶然と必然] 」MaCaffrey Fine Art、ニューヨーク
2017 「野村仁：光と地の時間」アートコートギャラリー、大阪
2018 「野村仁：宇宙開闢年表 Cosmic Sensibility が成し遂げた3 つのステージ又は 限りなく遠い記憶」アートコートギャラリー、大阪
「日本美術サウンドアーカイヴ－野村仁《音調、強度、時間を意識して、レコード(糸)を操作する》1973年」(Art & Space ここから, 東京)
2021 「野村仁 時空と生命：表徴化予想と顕れ」アートコートギャラリー、大阪
2022 「ACG Villa Kyoto Vol.009 野村仁 コスミック・センシビリティー：光子と膨張」ACG Villa Kyoto、京都
2024 「野村仁：コスミック・センシビリティー」アートコートギャラリー、大阪

【近年の主なグループ展】
2013 「Re: Quest ―1970 年代以降の日本現代美術」ソウル大学校美術館、ソウル
2015 「Re: play 1972 / 2015―『映像表現 '72』展、再演」東京国立近代美術館、東京
2016 「ART1 2016: Stepping into Fresh Snow」アートコートギャラリー、大阪
「宇宙と芸術展 かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」森美術館、東京／ArtSience Museum、シンガポール [-'17]
2017 「JAPANORAMA ― New Vision on Art Since 1970」ポンピドゥ・センター・メッス、メッス
2018-19 「アジアにめざめたらアートが変わる、世界が変わる 1960-1990年代」東京国立近代美術館/韓国国立現代美術館/ナショナル・ギャラリー・シンガポール
「ニュー・ウェイブ　現代美術の80年代」国立国際美術館、大阪
2019 「生きられた庭」京都府立植物園、京都
「REBORN ART FESTIVAL 2019」ホワイトシェルビーチ 荻浜エリア、宮城
「DECODE/出来事と記録－ポスト工業化社会の美術」埼玉県立近代美術館、さいたま
2023 「Re: スタートライン 1963-1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」京都国立近代美術館、京都
「コレクション企画　枠と波」豊田市美術館、豊田
「コレクションルーム 特集 Tardiology への道程」京都市京セラ美術館 、京都
2025 「MOMAWコレクション 現代の美術」和歌山県立近代美術館、和歌山
「モノのエコロジー」パリ日本文化会館、フランス
「トロイメライ」ハラミュージアムアーク、渋川
「ACG Reflections 2: 移行のメソッド－川田知志、野村仁、村上三郎－」アートコートギャラリー、大阪

【主な作品収蔵】
大阪中之島美術館／北九州市立美術館／岐阜県美術館／京都国立近代美術館／京都市美術館／国立国際美術館／埼玉県立近代美術館／
滋賀県立美術館／千葉市美術館／東京国立近代美術館／栃木県立近代美術館／鳥取県立美術館／ 原美術館／姫路市立美術館／
兵庫県立美術館／広島市現代美術館／目黒区美術館／森美術館／和歌山県立近代美術館／Dallas Museum of Art／Getty Research Institute／
International Center of Photography／Musée d'Art Moderne Saint-Étienne／Museum of Modern Art, New York／
San Francisco Museum of Modern Art